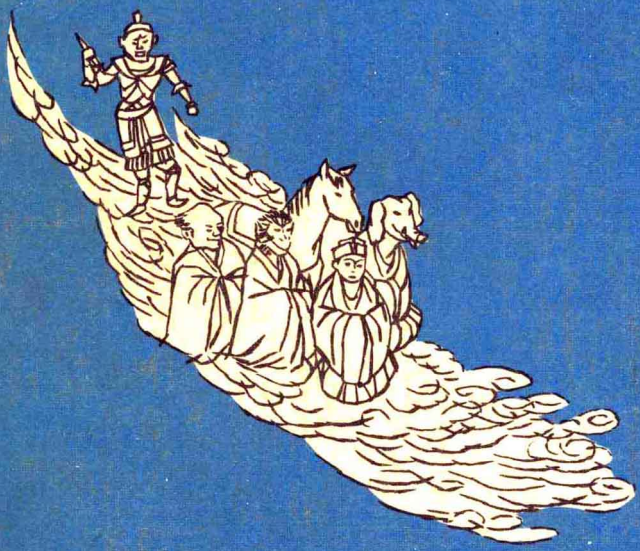
西遊記 下

呉承恩作　伊藤貴麿編訳



岩波少年文庫　3025

923 西遊記 下 (全三冊)
呉承恩作
伊藤貴麿編訳
岩波書店 1955
374 p. 18 cm (岩波少年文庫 3025)
中学以上

西遊記 下 (全三冊) 岩波少年文庫 3025

1955年6月25日 第1刷発行 ©
1979年6月15日 第21刷発行
¥450

編訳者 伊藤貴麿
東京都千代田区一ツ橋2-5-5
発行者 緑川亨

発行所 〒101 東京都千代田区一ツ橋2-5-5 電話03-265-4111 振替東京6-26240 株式会社 岩波書店

落丁本・乱丁本はお取替いたします

印刷・製本:法令印刷

西遊記 下

呉承恩作

伊藤貴麿編訳

岩波少年文庫 3025

目次

五四　火炎山……七
五五　芭蕉扇の秘密……二四
五六　震天動地の大合戦……三七
五七　小雷音寺……五四
五八　黄眉童児……六七
五九　稀柿衛……八一
六〇　朱紫国……九九
六一　烏金丹……一一六
六二　魔法の鈴……一三四
六三　鈴くらべ……一五一
六四　盤糸洞の女怪……一六八
六五　黄花観の道士……一八〇
六六　小子城……一九七
六七　清華洞の怪……二〇六

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

六八　皆がみなまで和尚……二一六
六九　分弁梅花の計……二二三
七〇　隠霧山……二五〇
七一　三人の孫弟子……二六六
七二　まぐわ会……二七九
七三　九頭のシシ……二九二
七四　寇員外……三〇八
七五　寇家の大難……三一八
七六　ついに経を取る……三三九
七七　決末……三五四
あとがき……二六二

さし絵　吉岡堅二

西遊記

下

五四　火炎山

さて三蔵は、観音菩薩のすすめによって、ふたたび孫行者を弟子に加え、一同力をあわせて西へ進むほどに、いつしか炎天の夏もすぎて、朝に霜おく秋のなかばとなった。道もしぜんにはかどって、ある日ひとつの村へさしかかると、ふしぎにも、きゅうにむうっとするような熱気をおぼえてきた。

「秋もなかばだというのに、かえってこのようにむしむしするとは、どういうわけであろうか。」と、三蔵が手綱をひかえていうと、八戒が一ばんに、

「なんでも、西のはてに斯哈哩国とかいうのがあって、そこは日の落ちるところで、一名『天尽頭』（天のつきるところ）とよんでいるそうだ。そこはべらぼうに熱いということだから、おおかたそこへきたんだろう。」というのを、行者はきいてふきだし、

「あほうめ、斯哈哩国だなんて、冗談も休みやすみいえ！　師父のように、みちみちこんなに手間どっていちゃ、生まれかわり死にかわり、三代経ったってゆけやしないよ。」

「じゃ兄き、日の落ちるところでなけりゃ、どうしてこんなに熱いんだい。」

「天のめぐりが逆になって、秋のつぎに夏がくるのかもしれねえ。」

沙和尚もこんなことをいい、がやがや言いながらやってくると、道ばたに、家も塀も、ぜんぶ赤い色をした、りっぱないなか家があった。

三蔵の言いつけで、行者がなるべく上品にとりすまして、門前まできてみると、なかから出てきたひとりの老人に、ばったりあった。老人ははじめはびっくりしたが、行者が礼をして、

「拙僧は、東土大唐からさしつかわされた者で、師弟四人、当処を通りかかりましたが、こんなに熱いのは、これはどうしたわけか、またいったい、ここはなんという所でございましょうか。」というと、老人はやっと安心して、笑顔をつくっていった。

「これはこれは、老いのしょぼ目で、お見それいたしました。して、師匠はいずれにおいでになります。」

そこで行者が手招きすると、三蔵はじめみなみな近づいてきて、老人にあいさつした。老人は、三蔵の顔かたちのみやびなのと、弟子のまれにみる醜さとに、よろこんだりおどろいたりして、ともかくも座敷に招じ入れ、召使いに茶や飯の用意を言いつけた。三蔵はまず立ちあがって礼をのべ、老人にたずねかけた。

「おりから秋にあたりますのに、どうしてこんなに熱気があるのでしょうか。」

「この地は、火炎山と申しまして、一年四季を通じていつも熱いのです。」

「火炎山はどこにあるのです。西へゆく道にあたってやしませんか。」

「さよう、その山はここから六十里ばかりで、西へゆかれるには、ぜひともそこを通らねばなりません。そこは八百里のあいだ火炎が燃えつづき、もしもこの山をすぎれば、銅鉄のようなからだでもたちまちとけてしまいます。」

三蔵はこれをきくと、顔色をかえ、おどろきのあまりだまってしまった。このときふと、そとを見ると、ひとりの若者が赤い車をおしてきて、

「もちや、もち！」とよんでいる。行者は毛を一本ぬいて、銅銭に変えてさしだすと、若者はポッポッと湯気の立ちのぼっている、一個の米の粉のもちをとりだして、行者にわたした。行者が手にうけると、まるでそれはまっかにおこった、炭火のように熱かったので、

「あつい、あつい！　これではたべられやしない。」とさけんで、両手の中を、左右にころがしていると、男はわらっていった。

「あついのをいとうていちゃ、ここへはこられない。」

「ときに、おまへにきくが、昔から『あつさ寒さもなければ、五穀はみのらない。』というが、こんなにあつくっちゃ、おまえのそのもちの粉は、どうして手に入れるのだ。」

「それは鉄扇仙にお願いするんさ。鉄扇仙は一本の『芭蕉扇』をお持ちで、そいつを借りてきて、ひとあおぎすれば火が消え、ふたあおぎすれば風がふき、三あおぎすれば雨がふって、五穀をまくにもことかかないというわけさ。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

行者はこの話をきくと、いそいでひらりと内に入り、三蔵にもちをささげて、
「師父、安心してください。いい話をききこみましたから。」といい、その家の主にたずねた。
「ちとおたずねいたしますが、鉄扇仙はどこに住んでおられますか。」
「どうしてそんなことを、おたずねになるのです。」
「さきほど、もち売りの話では、その仙人から芭蕉扇というものを借りてくれば、火が自由に消せるということでしたから、それを借りてきて、火炎山の火をあおぎ消して通行しようと思うのです。」
「その話はまことです。しかしあなた方は、礼物をもっていらっしゃらないから、おそらく仙人は承知いたしますまいよ。」
すると、三蔵がたずねた。
「どんな礼物が必要なのですか。」
「このあたりの人々は、十年に一ど、たくさんの豚や羊や、鶏やガチョウや、酒などのささげ物をもって、身を清めて仙山へゆき、仙人にお出ましを請うて、法を行っていただくのです。」
「その山はどの方角で、どのくらいの道のりがありますか。わたくしはうちわを借りにゆきたいと思いますから。」と、行者がかさねていうと、

「その山は西南の方にありまして、名を翠雲山といい、山中に芭蕉洞と申す仙洞がございます。わたくしどもがその山にまいりますには、往復一カ月もかかり、千四、五百里の道を歩かなければなりません。」と、老人はいったが、行者はわらっていった。

「わけはありません。すぐいってすぐ帰ってきます。」

「それでは、まあまあ、腹ごしらえをなすって、それから乾飯のご用意は、お供の人数は……」

「いらない、いらない！　ではいってまいりますぞ！」とさけんだかと思うと、たちまち見えなくなってしまった。老人はびっくりして、

「おお、おお、あの方は雲霧にのる神人でございましたか！」と言い、それからというものは、一家のものは、いっそう三蔵をたいせつにもてなした。

さて孫行者は、またたくまに翠雲山に飛びゆき、雲をおりて洞門をたずねていると、しきりにチョウチョウという音がひびいてくる。見ればひとりのきこりが木をきっていたので、行者は近よって一礼して、問いかけた。

「鉄扇仙の芭蕉洞というのは、どのあたりですか。」

「芭蕉洞というのはありますが、」と、きこりはわらいながら答えた。「鉄扇仙はおりません。ただ鉄扇公主、またの名を羅刹女というものなら住んでいます。」

「そのものは、芭蕉扇というものを持っていて、よく火炎山の火を消すことができるというが、ほんとうですか。」

「さよう、そのものは、ひとつの宝ものを持っていて、よく火を消し、あの地方の人々のためになるので、鉄扇公主（公主は姫の意味）などといわれているんですが、このへんの人間はべつに世話にならないから、ただ羅刹女とよんでいるきりで、つまりその女は牛魔王の妻です。」

行者はこのことばをきくや、さてはとおどろき、心の中で、

——これはかたきにめぐりあったようなものだ。まえに紅孩児を降服させたとき、かれはこの女の育て子だときいたが、そののちかれらの一家のものは、おれをさか恨みにうらんでいるというわさである。そんなありさまでは、容易にはうちわを借りることもできまい。……と思ったが、やれるだけやってみようと、ついに芭蕉洞の口まで来た。門の扉はぴったりしまっていて、見ればあたりは、なかなか趣きのある景色である。

「牛兄い、あけてくれ、あけてくれ！」と行者がよばわると、応ずる声がして、なかからひとりの女童があらわれた。

行者が用件をはなして、取次ぎをたのむと、小娘は、名まえをいえば通じてあげようといったので、行者はしかたなく、東土からきた孫悟空和尚だと答えた。と、娘は身をかえして奥に入り、羅刹女の前にひざまずいていった。

「奥さま、門のそとに、東土からまいられた孫悟空という方が、芭蕉扇を拝借いたしたいと申して、見えられておりまする。」
羅刹女は、「孫悟空」の名を耳にするや、みるみる面にくれないをみなぎらせ、怒りの形相すさまじく、
「あの悪ザルめ！　いよいよまいったか！」とののしり、腰元に装束と武器とをとらせ、身支度もきりりとして、ふたふりの宝剣をとり、門を出て高らかにさけんだ。
「孫悟空よ、いずれにあるか！」
行者は進み出て、ていねいに身をかがめて、
「姉上、それがし初のごあいさつを申しあげます。」というと、羅刹女は舌打ちしてさけんだ。
「なにが姉上じゃ、なんのためのあいさつじゃ。」
「ご主人牛魔王とは、その昔義をむすんで兄弟となりましたそれがし、ただいま公主が牛大兄いの令室と承ったので、姉上とよぶのになんのふしぎがありましょうや。」
「このおうちゃくザルめ！　兄弟のよしみもあるに、なにゆえにわが子をおとしいれたのじゃ。」
行者は空とぼけて、
「令息とはどなたのことです。」

「わが子とは、火雲洞の聖嬰大王紅孩児のことじゃ。……いつか仇を報じてくれようと思っていたところ、いまそちがみずからやってきたとは、これぞ天の与えじゃ！」

行者は満面にえみをたたえて、

「姉上、それは理屈にあわないさか恨みです。令息がわが師父をとらえて殺そうとしたので、観音菩薩がかれをさとされて、わが師父を救いだされたのです。いまやかれは、菩薩のもとで善財童子となっています。それがしに礼をいわれてこそしかるべきに、恨まれるとはなにごとですか。」

「わが子がたとい生きていようとも、会うことがかなわねば、なんの楽しみがあるか。」

「されば、芭蕉扇をお貸しくだされて、師父をぶじにお越させ申したうえは、そのお礼に菩薩に請うて、紅孩児をつれてきて、対面いたさせましょう。」

しかし、羅刹女の怒りはとけようもなく、

「化けザルめ！　つべこべ申さず、首をのばして、わが剣をうけてみよ！」と、行者を望んで切ってかかろうとした。行者は一礼してまえに出て、

「しからば、それがしの光った頭を、思うぞんぶん切っていただきましょう。それで気がすむものなら、おやすいこと、そのかわりうちわはきっと貸していただきますぞ！」というと、羅刹女はかっとして、諸手に剣をまわして、行者の頭を、切りつけきりつけすること十数度におよん

だが、行者はまるで感じもしないようである。羅刹女はついにおそろしくなり、身をかえして逃げようとしたので、行者が、さあはやく約束のうちわを貸してくれというと、かの女は、わが宝ものは、かるがるしく貸すべき品ではないとこばんだ。行者はもはやこれまでと、

「しからば、それがしの一棒をくらってみよ！」と、耳の中から例の棒をとりだして、ひとふりして椀ほどの太さとし、羅刹女に打ってかかると、かの女も剣をあげて迎え戦い、ふたりは翠雲山前で大立回りをはじめた。

やがて日は暮れてきたが、行者の棒ははげしくなるばかりなので、羅刹女はついに敵しがたしと見てとり、ここぞと芭蕉扇をとりだして、さっとひとあおぎすると、たちまち行者は、天外はるかに吹き飛ばされてしまった。

さても行者は、つむじ風にひるがえる枯葉のように、また流れる水にただよう落花のように、フワリフワリと一晩じゅうただよいとおして、あけがたになってやっとある山の上に落ちた。そして、よ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong